

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2023

2月に入り、この学年も残りわずかになりました。学年末テストなどもあり、これから忙しくなると思いますが、たまには本を片手に一息つくのはいかがでしょうか？

2月(如月・木芽月・梅見月)

※二十四節気※

立春 4日

初めて春の兆しが表れてくる頃のことです。旧暦では新年が始まります。この季節から最初に吹く南寄りの強い風が春一番です。

雨水 19日

降る雪が雨へと変わり、氷が溶けだす頃のことです。昔から農耕の準備を始める目安とされてきました。

図書委員からお薦めの本

『君の臍臓を食べたい』 住野よる 著 双葉社 出版

ある日、高校生の男の子は、「共病文庫」という一冊の本を病院で拾います。その持ち主はなんと、同じクラスの山内桜良。その本には臍臓の病気により、余命いくばくもないと書かれてありました。そんな彼女に振り回されながらも、二人の時間は大切なものへとなくなっていきます。「名前のない僕」と「日常のない彼女」が織りなす、青春小説です。読後、このタイトルにきっと涙します。ぜひ、一度読んでみてください。

(1年生女子)

3月図書館開館予定

(○:開館 x:閉館)

日	曜日	行事	図書	日	曜日	行事	図書
1	水	卒業証書授与式	x	11	土		x
2	木		○	12	日		x
3	金		○	13	月		○
4	土		x	14	火		○
5	日		x	15	水		○
6	月	高校入試準備	x	16	木		○
7	火	高校入試(生徒休業日)	x	17	金		○
8	水	高校入試(生徒休業日)	x	18	土		x
9	木		○	19	日		x
10	金		○	20	月	終業式	○

お願いとお知らせ

県立図書館協力図書の返却期限の最終日は、3月3日(金)です。入替えが予定されていますので、必ず期限を守ってください。特に卒業生は必ず返却してください。

その他の本は3月20日(月)が返却期限の最終日です。

また、3月の終業式以降は23日の午後のみ開館しています。卒業生で勉強に来る人は制服で来てください。

これも面白い 石川淳『普賢（ふげん）』

石川淳（1899～1987）台東区出身。浅草育ち。京華中学、東京外語専門学校（現・東京外大）でフランス語を学ぶ。ジッドの翻訳、旧制高校フランス語講師などを経て、作家に。『普賢』で昭和 12 年芥川賞受賞。戦中は江戸文学を研究。戦後「無頼派」の一人と目される。多くの作品を発表。代表作『普賢』『焼け跡のイエス』『最後の晩餐』『紫苑物語』『白頭吟』『夷斎筆談』などなど。

『普賢』（昭和 11 年）（昭和 12 年、第 4 回芥川賞）

普賢菩薩（サマンタパドラ）とは、釈迦如来の側において、白象に乗って衆生を救済する菩薩。中国の禅僧である寒山と**拾得**は、観音菩薩と普賢菩薩の化身と言われる。拾得は箒を持った姿で描かれる。本文中語り手「わたし」は、「下根劣機の身としては寒山の真似よりもまず拾得の真似で、風にうそぶき歌う前に箒をかついで地を払う修行こそふさわしかろう。しかし、かりにも拾得の箒（ほうき）を手にした以上、町角の屑（くず）をかきあつめるだけではすまず、文殊の智慧の玉を世話に砕いて地上に撒き散らすことこそ本来の任務」「願わくはかの大土のおん振舞、おん身において百宝の花を放ちたまう菩薩の遊戯、馥郁（ふくいく）たる普賢行につながろうとする一念を秘めて」文章を書こうとする。（私はここで付け加えたいのだが、赤塚不二夫の『天才バカボン』に出てくるレレレのおじさんは、箒（ほうき）で道を掃いている。赤塚不二夫は釈尊の弟子のチューリパンダカから着想したと言われるが、普賢菩薩との関連はどうだろうか？）いずれにせよ、箒で道を掃いている人は偉大なのだ。）

時代設定は恐らく戦前の東京（上野・日暮里エリア）。しかしいつかは明確に書いていない。いつどこにでもいかにもありそうな猥雑（わいごつ）な生活風景だ。人物関係が煩瑣で最初はやや読みにくいが、やがて面白く読める。

語り手「わたし」は若い書生で、ジャンヌ・ダルク頌歌（しょうか）を歌ったクリスティヌ・ド・ピザンの伝記を書こうとしている。が、筆が進まない。自分を取り巻く様々な人たちの騒動に巻き込まれ、右往左往している。周囲には、悪人ではないが、何をして生活しているか分からない、怪しげな小人物たちが右往左往する。あるいはアル中、あるいは生活能力がなく資産を失い、あるいはモルヒネ中毒、あるいは鉄道で轢死、あるいは遊郭の女を取り合う、あるいは資産の払い下げを狙い政治家に近づこうとする。これが、「わたし」が生きる濁世の現実だ。

注目すべきは、庵文蔵だ。「わたし」と同級生で、優秀な学生だったが、今や落ちぶれてアルコール中毒になっている。庵文蔵は、もうひとりの「わたし」だ。二人を分けるものは何か？ 「わたし」には、この濁世にあってもなお、普賢菩薩の衆生救済の行につながるべく、ペンを取る、という志がある。この一点において、「わたし」は庵文蔵とは区別される。実際には右往左往するばかりで、筆は進まないのだが・・・

ラスト近く、長年胸に秘めた思い人・ユカリの老いさらばえた姿に再会し「わたし」は幻滅する。庵文蔵は死ぬ。「わたし」は猥雑なこの下宿を引き払い、新しい生活に出発しようとする。

（登場人物）

わたし：書生。上野近辺、下谷車坂の下宿に住む。クリスティヌ・ド・ピザンの伝記を書こうとしているが、周辺の騒動に巻き込まれ、筆が進まない。/坂上青軒：政治評論家。「わたし」の先輩で、「わたし」に原稿を書く場を与えてくれる。/葛原安子：車坂の下宿の大家。厚化粧の女。何やらわけあり。/田部彦一：もとは軽井沢の資産家の子。今は没落。「わたし」の車坂の下宿の前の大家。日暮里在住。/お組：田部彦一の妻。モルヒネ中毒で病弱。/庵文蔵：「わたし」の同級生。かつてはハンサムなエリートだったが、今はアル中になっている。庵文蔵は観念的な文学論を「わたし」に向かって語りかける。/ユカリ：庵文蔵の妹。「わたし」の思い人。が、革命家と逃亡。/垂井茂市：新宿や上野エリアをふらふらしている人物。/寺尾甚作：謡（うたい）の師匠。妻がいるが、浮気をする。/寺尾久子：甚作の妻。肋膜が悪い。夫の浮気で倒れる。/綱ちゃん：須崎の遊郭の女。甚作の浮気相手だったが最近では茂市と親しいようで・・・